

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 49

2017.2.25発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 49 回 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ 『大泉寺の東名高速春日井 IC と国道 19 号線交差付近の開発』

平成 29 年 2 月 5 日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『大泉寺の東名高速春日井 IC と国道 19 号線交差付近の開発』と題して本会副会長塚田忠雄氏に講演していただきました。

「昨年 7 か月以上にわたって大泉寺のため池と農業用水、水田の調査を行い、すっかり大泉寺の隅々を歩き、地元の方から多くのことを学んだ。その大泉寺に都市計画道路北尾張中央道(国道 155 号線拡幅・路線変更)の計画と新市道計画が進行していることを知り、春日井市が IC 付近で新工業団地 4ha を開発、市独自の買収で造成、2017 年中には企業誘致を行うことを知り、さらに深く調査を行った。」と語られ、大泉寺地域の開発の「問題点」と「提言」を講演されました。参加者は 15 名でした。



会場風景

講演：塚田 忠雄 氏

－発表要旨－

I.第 11 回「春日井学」(2014.1.5)で紹介した「春日井市アクションプラン(H21)」は次の内容、

- 1) 商業系土地利用では、①中心的な市街地として鳥居松地区と勝川地区への各機能集積とその2ヶ所が「魅力ある都市拠点」となる。ただし、「中心的な市街地」は中活法にいう「中心市街地」とは違う。②それ以外の鉄道駅周辺が、それぞれの特性を活かし、地域の核として「賑わいのある」商業地の形成に努めるとした。
- 2) 商業振興は、「春日井市産業振興アクションプラン」の中で、「駅周辺の商業の活性化・小規模な事業者の活性化が課題」だとし、JR勝川駅・春日井駅・高蔵寺駅周辺の活性化をあげる。観光は、本市には「見るべき観光資源がない」として、「都市型観光」のアプローチにより、魅力的・個性的な物販・飲食や産業観光、イベントで来訪者を拡大するとした。
- 3) 商業の活性化・振興とは別に、土地利用について「都市交流拠点」「文化の拠点」のように人が「集い交流する魅力ある都市拠点」とする。JR勝川・春日井・神領・高蔵寺の各駅と名鉄味美駅が前者、市役所周辺が後者の拠点と例示するが、商業振興とは必ずしも結びつかない。「歴史を学ぶ場」も密蔵院と高御堂古墳の周辺を例示する。歴史遺産の活用による「歴史を学ぶ場」はまだまだ発掘をする必要がある。「書のみち春日井」の発信策の中に、小野道風誕生地伝説の歴史検証は全く抜けている。高蔵寺ニュータウンの都市空間をどう活かすかも「住民の定着化」「住み続けたい」という“魅力”は防衛的表現だ。

旧「アクションプラン」の中に「東名高速 IC と国道 19 号線交差点付近の開発」の具体化については書かれていない。本日は「都市計画マスタープラン」にある地域別構想の動きを探る。

II.春日井市の小売業の推移(平成 27 年版「春日井市統計書」P74、商業統計調査より)

	商店数	従業員数	年間販売額
H11.7	2,310 店	16,381 人	29,074,687 万円
H16.6	1,934	15,708	29,277,883
H19.6	1,856	15,957	30,652,369
H26.7※②	1,285	11,649	23,996,039
③	1,728	16,033	

① 従業員数に臨時雇用者は含まない。無給家族従業者は含む。
② H21 より「経済センサス」の創設で、「商業統計調査」は中止。③ 経済センサスは公務を含まず。従業員 1-4 人の事業所に「従業員なし」(派遣下請従業員のみ)

を含む。

④ H26 年度からの「新アクションプラン」は H19.6 調査の商業統計調査を使っている。小売業では、①平成 11 年から平成 19 年の 8 年間で、商店数は 20%減、従業員数は 3%減となっている。しかし、平成 27 年版「春日井市統計書」を調べてみると②平成 11 年から

26年までの15年間で小売業店舗数は44%も減少した。従業員数は29%の減少であった。

③平成19年から平成26年の7年間、商店数31%減、従業員数27%減、販売額22%の減少は真剣に向き合うべきデータである。衝撃的なデータであり、現状分析をやり直すべきである。ただし、表中の㊸2は「経済センサス」の創設後で、統計値の継続性に欠けるが、注目に値する。

III.平成26年度からの戦略的実行計画となる改定版「産業振興アクションプラン」について

この策定は平成26(2016)年3月に冊子が発行されている。春日井市のホームページで見られるが、110頁を超える。無料で配布すべきだ。店主もほとんど見ていない。その要点は、平成21年度に策定したものは、その後の経済状況の変化で変わっており、一層の地域経済の成長と産業振興振興のために、平成26年度からの新しいものにした。全面改訂したというがさして新しくもない。一番の変化はその柱を製造企業のみを対象としてきたのを、地域活性化のために商店街等への支援に積極的に取り組むとした点である。

従前の柱	…①企業誘致	②企業の育成・活動支援	③創業支援
------	--------	-------------	-------

今回の柱	…①企業誘致(優良企業)	②事業者支援(市内中小企業の育成支援)	③地域活性化
------	--------------	---------------------	--------

従前でも商業の振興戦略はあげてきたが、「地域活性化のために活動する商店街等への支援」に積極的に取り組むと、その活力と魅力づくりをまちづくりに活用したいと前面に出して期待する。商店街振興や商業振興のことを指しているわけではない。これらのプランは中部大学と商工会議所・観光協会の連携で主に実行される。視野が狭いのが特徴だ。また、統計の数字は全数調査ではない。サンプリングである。統計の読み取り方には問題が多い。統計のグラフに「N」が示されているが、客数では全体167とある。母数167のことである。商業・サービス業はN=79である。これで現状把握と将来予測など到底無理である。

春日井市内の商店街組合の加盟店数は、平成24年度で、いちよう並木通発展会が最高で77店、勝川駅前商店街52店、高蔵寺発展会38店、鳥居松発展会35店、勝川駅東商店街34店、鳥居松広小路商店街31店、19号線バイパス通30店が30店舗以上。味美26、東野23、鳥居松本通17。1982(昭和から30年間で784店から363店へと41%減少した。全数調査をしないと実態がみえない。P93で小規模商店・サービス業の具体的な問題を問う質問で、N=50のうち46%が無回答だ。

IV. 大泉寺の溜池と水田(3)大泉寺町字大池下開発～字大池下は市街化調整区域

(1)「春日井市都市計画マスタープラン」(H22.3まちづくり推進部都市計画課編集・春日井市発行)によると、「将来都市構造」の設定がなされ、JR中央線各駅周辺を勝川、春日井、神領、高蔵寺を拠点に、また名鉄小牧線の味美駅拠点とする計5箇所を「都市交通拠点」とする。東名春日井インター周辺を「中北部地域」とし、農地とともに産業系土地利用の誘導と住宅地形成を図り、住・工・農が調和したまちづくりを目指すとしている(目標)。①周辺環境とアクセス利便性を活かす。②インターチェンジ周辺の交通円滑化と広域交通の拠点としての景観づくり。③緑の拠点を活かした、水と緑のネットワークづくり。④優良

な農地を大切にした秩序ある住環境づくりをあげ、「方針」としている。**大泉寺地区の開発構想**である。中北部地域拠点の多くが産業誘導ゾーンだ。図では、どこが優良農地なのか、住宅地域か、緑地なのか不明だ。

(2) 北尾張中央道の計画

国道 155 号線(小牧春日井線)の東山から籠池の西を通り、新設計画の**北尾張中央道**を横切り、鉢池と鉢小池の間の現在の農道を拡幅し、大泉寺大池の南を通って、国道 19 号線の下を通り、下街道を横切り、南に下り、新設計画の北尾張中央道につながる。この「**東山大泉寺線**」は春日井市が担当する。北尾張中央道はすでに、ピーチライナーと並走して出来ている「新」国道 155 号線が大草の福厳寺の横を通り、大草西までできているが、これが延びて、茨池の現在の池を分断している農道を抜けて直線道が作られる。当初の尾張都市計画道路は昭和 44(1969)年 5 月 20 日に決定された。立体交差は地上より 5m 以上の嵩高式がとられる。平成 26(2014)年 10 月「第 1 回春日井市都市計画審議会」(会長 中部大学教授磯辺智彦氏、会長職務代理者同大教授大塚俊幸氏)で、尾張都市計画道路の変更、同緑地変更、同生産緑地地区の変更の原案を決定し、春日井市長に答申された。北尾張中央道は**広域交通としての位置づけ、有事の際の緊急輸送道路として位置づけ**られている。管轄は愛知県である。

V. 「春日井 IC 近く、農地 4 畝買収へ、市、企業誘致推進」 中日新聞 2016.8.18 付

近郊版に、大泉寺国道 19 号春日井インター東交差点北側の国道沿いにある休耕田などで、市の**都市計画マスタープラン**(基本計画)の中では、企業を誘致する「**産業誘導ゾーン**」のひとつとして位置付けられていると報道した。これまでに地権者約百人への説明会と意向調査を終了。今後、周辺住民への説明会や測量、境界の確定をした後、造成に関する設計を経て買収、造成に入る。インターチェンジ付近で、物流関係の企業誘致が考えられると記事にした。市では、物流関係に限っているわけではないという。「道の駅」構想は動きがあったが頓挫した。

VI. 大泉寺の開発の問題点と提言

すでに中北部地域(IC 周辺)では産業誘導ゾーンと位置づけ、物流拠点のための測量・地籍確定が 1 月末には終わった。「**新工業団地**」と呼ばれている。しかし、調査結果はいつものところ公表されていない。産業誘導ゾーンの具体的範囲も明確ではない。宅地開発区域も不明確だ。個人所有地だからという非公開が続いている。この地の宅地開発の問題点は、一つには、地域確定はもちろんだが、その前に、ため池決壊による被害予想(ハザードマップは公開されている)がある。平成 16 年 10 月に、国有ため池は春日井市に所有権移転登記がすんでおり、すべて春日井市の責任で管理されている。現地の人¹はため池堤の決壊が一番怖いといていた。農地私有者との合意形成、市街化調整区域の解除問題は農業委員会と県知事の宅地転用の認可などの行政的な手続き問題だけではなく、市民のための総合的な開発計画の視点で進められる必要がある。住宅開発と優良な農地との共存は、住環境問題にとどまらない。市民参加の農園など利用を含めての検討が必要だ。次に問題なのは**亜炭鉱跡**の

陥没の可能性の問題だ。潮見坂墓苑には亜炭鉱陥没箇所が 270 箇所以上もあった。大泉寺大池の東から、国道 19 号線を挟んでかつて亜炭鉱があった。大池の水の浸潤で落盤を免れているといわれている。さらに、宅地造成規制法による規制地域がある。大泉寺町は大池下・石仏・社下、東山は平橋 1~5 丁目。東名高速南西を除く。松本、出川、不二ヶ丘などあり、崖崩れ、土砂流出などの恐れが著しいところで、災害防止の対策が義務付けられている。建築基準法第 22 条指定では市街化調整区域での条例による無指定という規制もある。都市計画区域でも区域内に無線引き無指定があり、「秩序ある住環境」は個人で土地を取得して住宅を建てて住むのはいかに難しいかわかる。総合的で計画的な開発が必要であることがわかる。行政による都市計画は私有地の「所有の社会性」がありながらも入り込めない壁がある。東日本大震災からの復興計画の壁から私たちは多くを学んだが、行政にはその壁を崩す大胆な試みに挑戦する意欲が必要だ。亜炭鉱跡の情報公開も求められる。(記録：塚田 忠雄)

OPINION

『ふるさと春日井「まちづくり」の風景』

— 「ふるさとの想い」を大切にしたい「地域開発」を願う—

2012.6.23

春 秋

「まちづくり」と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。大がかりな区画整理、公共施設や道路の新設か。あるいは、地元根ざした催しの復活や古い建物の再生か。住む街の魅力を高めたいとの思いは同じでも、実際には対極ともいえる行動が一つの言葉で語られる。

▼役所では主に建物や道路の新設を指す。混乱や誤解を避けるためか、市民グループなどで新語を使う例が増えた。街並みを残す「まちのこし」。今あるものや人のつながりをうまく使う「まちいかし」「まちづかい」。お上に任せず自分で街を育てる「まちでたて」。左向ききも。歴史大を生かすが最近の流れだ。

▼埋め立て・架橋が景観保全か。対立が続いた広島県福山市の港町、柄の浦の新連建設で、県が工事計画を撤回する方針を固めた。3年前の差し止め判決、裁判所が「国民の財産ともいふべき公益」と表現した昔ながらの景観を守るためだ。目的の一つだった洗滌解消には山側にトンネルをつくる代替案を検討するという。

▼この計画当初は今も残る旧中心街を取り壊し、旧道を拡張する予定だった。同種の構想がそのまま実現したくないで、風情ある街が画でどれだけ消えたらどう。路地や街並み、景観を生かしつつ、架橋推進派が望む防災や誘客も実現する。柄の浦にはそんな新しい時代のまちいかし、まちでたての先駆例になってほしい。

2012.9.6

春 秋

「昔はよくカワウソをみかけたものだ。父親がこう語るのを耳にしたのは、40年以上前のことだ。その日か、村の近くを流れる川のそばを通るたびに、それらしき姿を探そうになった。残念ながら、ついに会えなかった。それでも、あの川は豊かだったと思う。

▼フナがいた。ウグイがいた。浅瀬の石に吸いつくようにしていたツメワナギは、子どもたちの格好の遊び相手だった。土手の上に並ぶ木々はカブトムシやワガタムシの天国で、子どもたちには宝の山だった。ある日、その木々がすべて焼き払われた。やがて大々的な護岸工事が始まり、慣れ親しんだ川ではなくなった。

▼「大人たちは勝手だ。子どもたちの多くがそう思った。「俺たちの意見も聞いてほしいか」と。いま振り返ってみれば、治水のために必要だったのだらう、とは思う。そう思うことで納得しようとするのだが、胸の痛みはおさまらない。あの生き物たちを根こそぎにするような乱暴な工事が本当に必要だったのか、と。

▼熊本県が球磨川の下流にある県営ダムを撤去に乗り出した。アユの生息で知られる清流を取り戻す狙いだらう。列島をコンクリート漬けにしたあげく、今度はコンクリートをほかでどうしようわけか。そんな皮肉な感想も浮かんでくるが、清流が復活するのは歓迎だ。カワウソに会える可能性はもうないのだとしても。

上記の「日本経済新聞」の記事を読んで、「まちづくり」とは、「地域開発」と言う名の「地域活性化」とは何かということを改めて考えさせられることになりました。

「春日井市都市計画マスタープラン」(H22.3 まちづくり推進部都市計画課編集・春日井市

発行)は、住・工・農が調和したまちづくりを目指すとしています。塚田氏の講演を興味深く聞いて思うことは、大泉寺地域は、農業用水としての溜池の点在する自然豊かな農業地域です。産業構造の変化、社会構造の変化は人間の生活意識の変化にも大きく影響してきています。当然「ふるさと意識」も大きく変化せざるを得ない流れです。確かに「背に腹はかえられない」と言う考え方も理屈として成り立ちますが、もう一方では、のか」「歴史、自然、人」を活かした開発になっているのでしょうか？「本当にこれでいいのか」という「本質」的のところを立ち止まって考えてみる必要があるのではないかと感じました。

自然を保全し歴史的な原風景を活かしながら時代にマッチした農業地帯、住環境地域にはできないのだろうか、地域住民の「ふるさとに対する様々な想い」は充分汲み上げられた合意形成になっているのだろうか。溜池のハザードマップや亜炭鉱跡の調査結果は、住民に十分な「安心・安全」の納得を得られているのだろうか、と勝手な心配を抱いてしまいました。「地域活性化」「地域づくり」の基本は「ふるさと意識」に根ざした「豊かで安心・安全な生活空間を創る」ことであると言われていています。伝統や文化、自然を大切にして、生活している人々が幸せを感じることでできる都市（地域）環境をつくる開発計画になっているのだろうか？一度失ったらもう創り出すことができない自然、文化財の保護・保存につとめ、千数百年の文化を大切にすることを踏まえた開発計画になっているのでしょうか？従来までの「開発計画」の反省の多くは「過ぎたるは、及ばざるがごとし」「知りて過ちを犯す」（P.Fドラッカー）であったことを考えとき、100年先にも、「やって良かった」と思える「地域開発」であることを願わざるをえません。先人の忠告を肝に銘じながら、つらつら考えてしまいました。

（文責：河地 清）

〈お知らせ〉

次回 第51回（4月予定）「ふるさと春日井学」研究フォーラムについては、現在、場所、日時、テーマが、未定です。

コンセプトは、「ふるさと春日井」の魅力を再発見するFORUM「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」で変更はありません。

現在中部大学「不言実行館」（開学50周年記念で建設された新館）で行

えるように話が進んでおります。決定次第連絡いたします。

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索

